

# 土居遺跡



2009年3月

岡山県  
勝央町教育委員会

# 土居遺跡



2009年3月

---

岡山県  
勝央町教育委員会

---

## 序 文

岡山県勝央町は、町の中心部を南北に滝川が流れ、なだらかな丘陵地帯が広がっています。古来より人々が住みはじめ、町内には800箇所にも及ぶ遺跡が存在し、現在まで豊かな文化を育んできました。

このたび勝央町黒土地区において分譲住宅地造成が計画されました。黒土地区は近年、宅地化が進んでいますが、地下に残された埋蔵文化財も非常に多く確認されています。このことから、原因者側と遺跡の保存について協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず遺跡を損壊する箇所については記録保存の処置をとることとなりました。

土居遺跡では、弥生時代の集落の一部が発見されました。大きな竪穴住居跡が発見されるなど、本町の歴史を知るための重要な成果があげられました。こうした調査の成果は現代を生きるわれわれに何らかの形での示唆を与えてくれるものであると思われます。

この報告書が勝央町の歴史を理解するための一助となり、また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

調査にあたっては、多岐にわたりまして様々なご尽力をいただきました方々、及び発掘調査に参加していただいた方々をはじめ、各方面からのご支援、ご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

平成21年3月30日

勝央町教育委員会

教育長 岸 本 耕 二

## 例 言・凡 例

1. 本書は、岡山県勝田郡勝央町黒土地内に所在する土居遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、民間の分譲住宅地造成に伴うもので、ミサワホーム中国㈱の委託を受けて、勝央町教育委員会が平成18年度に発掘調査、平成20年度に報告書作成作業を実施したものである。
3. 土居遺跡は、岡山県勝田郡勝央町黒土字吉政337-1ほかに所在する。
4. 発掘調査は、平成19年1月12日～1月31日の期間に行った。
5. 調査に係る経費についてはミサワホーム中国㈱が負担した。
6. 調査及び報告書作成は勝央町教育委員会教育振興部が行い、調査及び本書の執筆編集は勝央町教育委員会教育振興部 國 正雄が担当した。
7. 本報告にかかる遺物・写真・図面は勝央町教育委員会で保管している。
8. 発掘調査に際して以下の方々のご協力をいただきました。記して感謝の意を表します（敬称略、順不同）。 大澤公治 大澤 敦 岸元 嶽 加藤 清 谷口るり
9. 標高値は東京湾標準潮位（T.P.）を基とし、基本的に方位については磁北を指す。
10. 本書における遺構及び遺物実測図の縮尺については明記しているが、主なものは以下のとおりである。 遺構：竪穴住居（1／80） 遺物：土器・石器（1／4）
11. 遺物番号は、土器は番号のみで、金属製品はM、石製品はSを番号の前に付けている。

## 本 文 目 次

### 序文

### 例言・凡例

### 目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	3
第1節 調査にいたる経緯	3
第2節 確認調査・発掘調査の経過と概要	4
第3節 発掘調査の体制	4
第3章 発掘調査の概要	5
第1節 遺跡の立地と調査の概要	5
第2節 検出された遺構・遺物	5
第3節 まとめ	12

### 写真図版

### 抄録

# 第1章 地理的・歴史的環境

勝央町内には約800箇所の遺跡が確認され、県下でも有数の埋蔵文化財包蔵地帯となっている。なかでも今回調査された土居遺跡の位置する黒土地区は勝間田平野の東部に位置し、低丘陵や台地上に多くの遺跡が確認され、町でも遺跡密度の高い地域である。以下では、町南部の黒土地区周辺の遺跡について触れていく。まず町内最古の遺跡として、黒土大河内遺跡で縄文草創期の尖頭器や石鎌<sup>(1)</sup>がまとまって発見され、町の歴史を巡ることとなった。弥生時代では、黒土地区周辺の発掘調査が進んでいることもあり、集落の変遷が迫れる。まず前期に遡る土墳墓が大河内遺跡で発見され、今後、この時期の集落が発見される可能性が高い。町内全域で多くの集落が展開するのは中期に入ってからで、中期中葉には黒土小池谷遺跡、中期後葉には大河内遺跡などで住居跡などが発見されている。中期後葉から後期には、町北部の鳥羽野周辺において銅鐸が出土している念仏塚遺跡があり、拠点的な集落と考えられる他、南部でも建て替えを含め300軒を超す住居跡が確認されている小中遺跡が調査され、滝川下流域の拠点集落と考えられる。後期末には、今回報告する土居遺跡、対岸にある小矢田<sup>(2)</sup>の宮ノ上遺跡<sup>(3)</sup>で住居跡が発見されており、丘陵裾の台地上に展開する当時期の集落像が明らかとなりつつある。続く古墳時代には町内全域から多数の古墳が確認されている。古墳時代前期～中期前半頃には町北部の美野平野周辺に美作最大の横月寺山古墳（全長約90m）、美野高塚古墳（全長約70m）をはじめ、多くの前方後方墳が密集する。南部の勝間田周辺の丘陵でも前方後円墳の琴平山古墳（全長約48m）、坂塚古墳（全長約48m）などが存在する。中期前半では小規模な円墳である宮ノ上1号墳において竪穴式石室から銅鏡2面が出土している。中期後葉以降は、前方後円墳の愛宕山古墳（全長約28m）、よつみだわ2号墳（全長約20m）を筆頭に、木棺直葬を主体とする群集墳である小中古墳群、<sup>(4)</sup>小池谷古墳群などが発見されている。後期後半には横穴式石室を中心とした岡高塚古墳群が存在する。続く古代には美作国勝田郡衙に比定される勝間田・平遺跡が存在し、正庁と見られる大型建物や築地遺構などが確認されている。平安時代末～鎌倉時代にかけては、岡山周辺や畠屋・東吉田一帯に須恵器系中世陶器である勝間田焼の窯が50基以上確認されており、勝間田古窯跡群と呼称されている。この時期の集落跡として勝間田の石仏上遺跡の他、大河内遺跡や藤ヶ瀬遺跡において、大型の掘立柱建物が発見されており、勝田荘の東部一帯の水田經營を行う有力者の屋敷と見られている。中世<sup>(5)</sup>後期の集落では大河内遺跡の北に位置する遺跡が発見されている他、城館では植月宮山城や小矢田城が代表的なものである。近世には参勤交代のため出雲街道の宿場町として勝間田が整備された。

\*本文は、勝央町教育委員会1999「福吉丸山遺跡」「勝央町文化財調査報告4」の「地理的・歴史的環境」を参考に、最新の成果を取り入れたものである。

(1) 岡本泰典ほか「大河内遺跡」「岡山県埋蔵文化財調査報告」216 岡山県教育委員会 2008

(2) (註1文献)

(3) H12～H14勝央町教育委員会調査 「美作勝央発掘ものがたり 報告会発表資料集」2006

(4) (註1文献)

(5) 朝倉秀昭ほか「小中遺跡」「岡山県埋蔵文化財調査報告」117 岡山県教育委員会 2005

(6) 荣田英樹ほか「宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群」「岡山県埋蔵文化財調査報告」197 岡山県教育委員会 2006

(7) (註6文献)

(8) (註5文献)

## (9) (註3文献)

(10) H13～H14勝央町教育委員会調査

## (11) (註1文献)

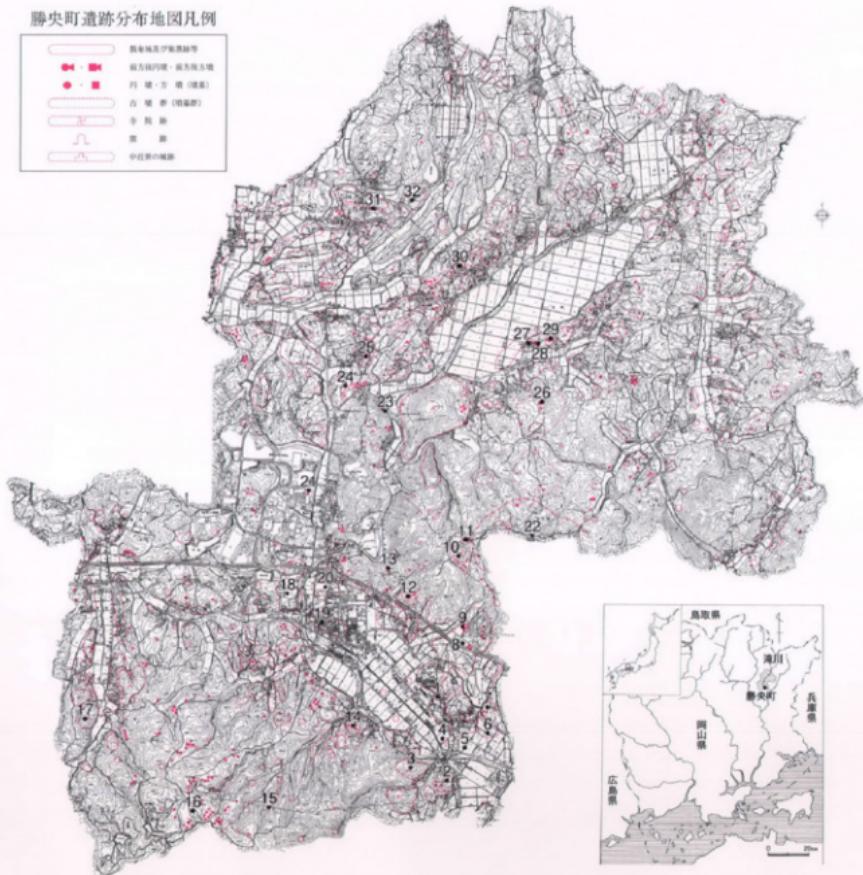
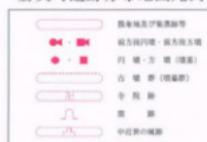
(12) H16～H19勝央町教育委員会調査

(13) H17～H18勝央町教育委員会調査

『美作勝央発掘ものがたり 報告会発表資料集』2006

『美作勝央発掘ものがたり 報告会発表資料集』2006

勝央町遺跡分布地図凡例



- |              |             |             |             |
|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 土居遺跡      | 9. よつみだわ古墳群 | 17. 神田山城    | 25. 宮山城     |
| 2. 宮ノ上遺跡・古墳群 | 10. 高塚古墳群   | 18. 勝間田・平遺跡 | 26. 田井高塚古墳  |
| 3. 小矢田城      | 11. 四高塚古墳   | 19. 勝間田宿場跡  | 27. 西宮神社裏古墳 |
| 4. 藤ヶ瀬遺跡     | 12. 殿塚古墳    | 20. 石仏上遺跡   | 28. 美野中塚古墳  |
| 5. 大河内遺跡     | 13. 平山古墳    | 21. 愛宕山古墳   | 29. 美野高塚古墳  |
| 6. 及遺跡       | 14. 東光寺古墳群  | 22. 開山高福寺跡  | 30. 植月寺山古墳  |
| 7. 小池谷遺跡・古墳群 | 15. 進上谷窯    | 23. 戸岩窯     | 31. 島羽野遺跡群  |
| 8. 小中遺跡・古墳群  | 16. 七十古墳群   | 24. 広高下古墳群  | 32. 念仏塚遺跡   |

第1図 遺跡分布地図 (1/40,000)

## 第2章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 調査にいたる経緯

平成18年10月、ミサワホーム中国㈱から勝央町黒土地内で計画中の分譲住宅地造成地内における埋蔵文化財の有無についての照会が勝央町教育委員会にあった。予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である土居遺跡に含まれていることや南側200mの地点の歩道整備に伴い岡山県教育委員会が発掘調査を実施していることなどから遺跡の存在が濃厚と考えられる旨回答を行った。平成18年10月16日付けで文化財保護法93条の規定に基づく届出の提出を受け、詳細な協議を行った。岡山県教育委員会から事業者宛に確認調査を実施するよう回答があり、まず確認調査を実施し、その結果をもとにあらためて協議することになった。確認調査は平成18年11月7日～17日に実施した。調査の結果、すべてのトレーニングから遺構・遺物が発見され、遺跡の広がりが明らかとなった。この結果をもとに再度協議を行い、宅地となる部分は設計変更により盛土保存すること、進入道路部分については遺跡の破壊を免れず全面調査を行うことで合意した。平成18年12月14日付けで町、事業者、地権者とで発掘調査委託の契約



第2図 調査位置図 (1/6,250)

を締結し、平成19年1月5日～31日まで現地調査を実施した。

（註1）重根弘和ほか「土居遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告』195 岡山県教育委員会2005

## 第2節 確認調査・発掘調査の経過と概要

確認調査は予定地を対象にT1～T4の4箇所を実施した。その結果、T1、T2で住居跡を確認した。T2は当初、厚く堆積する包含層と理解していたが、本調査で住居跡と判明した。T3、T4では削平を受けていたが、柱穴などを確認し、全域に遺跡が広がると判明した。

発掘調査は、ちょうどT1、T2をつなぐような位置となった。表土を重機で除去後、人力で包含層掘削、遺構の精査、掘削を行った。個別の遺構については半さい、もしくは土層観察用のベルトを残し、実測、写真撮影等の記録を作成した。図面は、個別遺構を1/20、全体平面を1/50縮尺で作成した。幅が狭く、長細い調査区となり、幅5m×長さ30mで、総面積は約150m<sup>2</sup>である。立地などから遺跡の中心付近と思われ、大型の竪穴住居跡等を確認した。このうち、東側で検出した竪穴住居は規模が大きく、確認調査時に包含層と認識していたため、時間的制約から詳細な調査ができなかった。その後、報告書作成は、平成20年4月～平成21年3月に実施し、平成21年3月に本報告書を刊行した。



第3図 試掘・本調査位置図 (1/1000)

## 第3節 発掘調査の体制

平成18年度

調査主体	勝央町教育委員会	教育長	岸本耕二	主　　査	竹内祐三
	教育振興部	総括参事	光石和廣	技術史員	園　正雄（調査・整理担当）
		参　　事	小村勝彦		
		参　　事補	厨子一久		

平成20年度

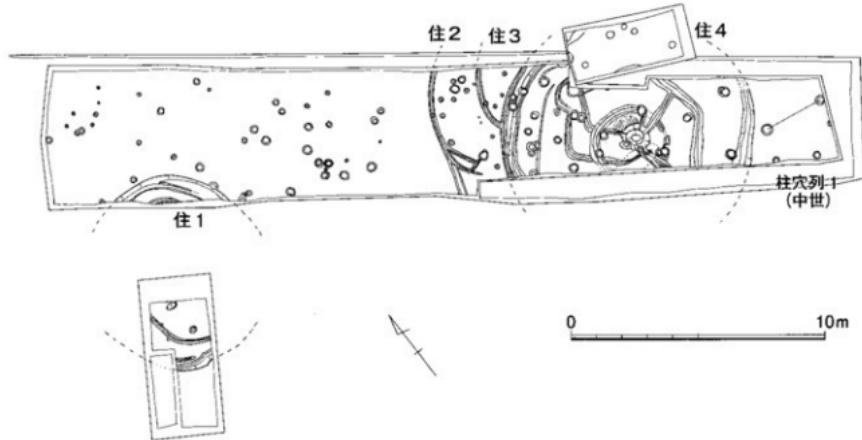
調査主体	勝央町教育委員会	教育長	岸本耕二	主　　査	竹内祐三
	教育振興部	参　　事	小村勝彦	技術史員	園　正雄（調査・整理担当）
		参　　事補	厨子一久		

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の立地と調査の概要

勝間田平野東端部、標高250mの丘陵が連なる間山から南に延びる低丘陵が勝間田平野を東西に分断するように南に大きく迫り出している。この丘陵の斜面裾は平野から1段高くなった台地となっており、平野を望める好立地となっている。土居遺跡はこの丘陵の西側斜面裾に位置し、周辺には古墳～中世期の土器が広範囲に広がる散布地であったが、平成16年に国道179号線歩道整備に伴って岡山県教育委員会による発掘調査が行われ、初めて古墳～中世の集落の存在が明らかとなった。今回の調査地はそれより200m北に位置し、地形から遺跡の北端と考えられる。調査総面積は約150m<sup>2</sup>である。今回検出された遺構は大部分が弥生時代で、竪穴住居跡、ピット、溝などがある。竪穴住居跡1のみ単独で確認された以外は、東側で重なる位置に3軒が確認されている。その他、鎌倉時代の柱穴列などが確認されている。付近の基本的な地層は地山が黄褐色粘土層であり、その上には弥生時代の包含層と見られる黒褐色砂質土層が覆っている。西端付近には中世の包含層と見られる灰褐色粘土層もわずかに残存するが、大部分は後世の田畠造成のためやや削平を受けており、表土直下で地山が検出される。以下、遺構・遺物の概要を述べる。

### 第2節 検出された遺構・遺物

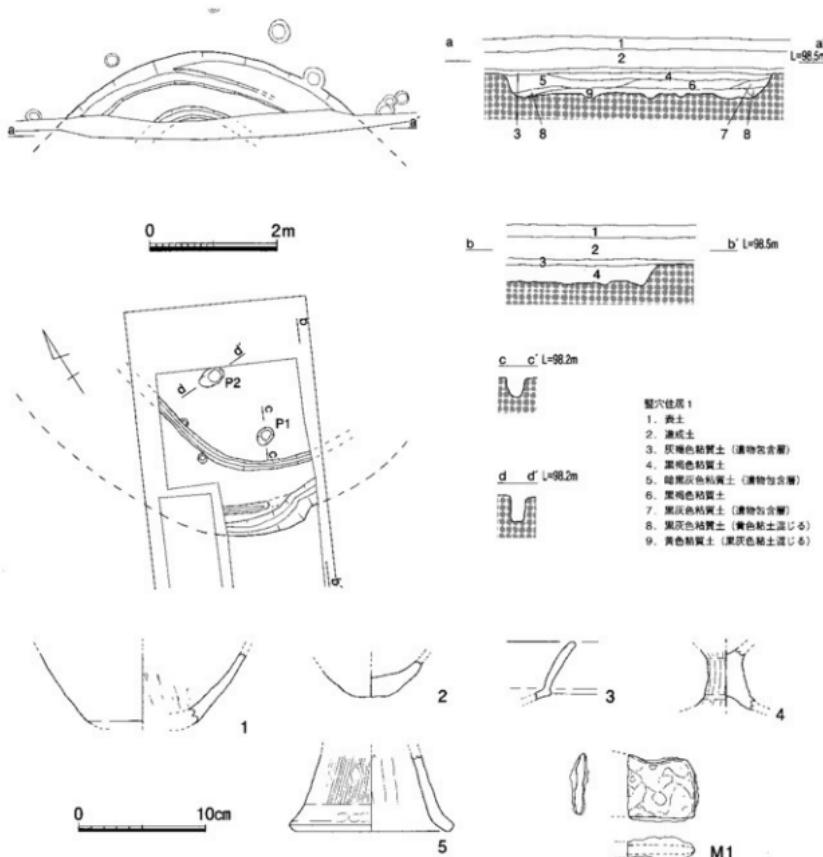


第4図 遺構全体図 (1/200)

## 1. 弥生時代の遺構・遺物

### 竪穴住居 1 (第5図)

調査区西側で検出した竪穴住居跡である。表土直下にわずかに中世の包含層が認められ、それを除去後に遺構が検出された。本調査区内では北側の一部を検出したのみで、大部分は調査区外に続いているが、南端を確認調査時のT 1において検出している。平面形態は円形を呈し、南北幅は直径75mを測る。床面までの深さは20cmを測る。周壁溝は北側で2条、南側で3条確認しており、最低2回の建て替えが認められ、拡張されていったようである。北と南の床面は同じ高さになっている。主柱穴は南側で2本のみ確認され、深さはP 1で30cm、P 2で40cmを測る。埋土は主に黒褐色粘質土、黒灰色粘質土が堆積していた。遺物は埋土中から出土しているが、量は少ない。出土遺物には弥生土器

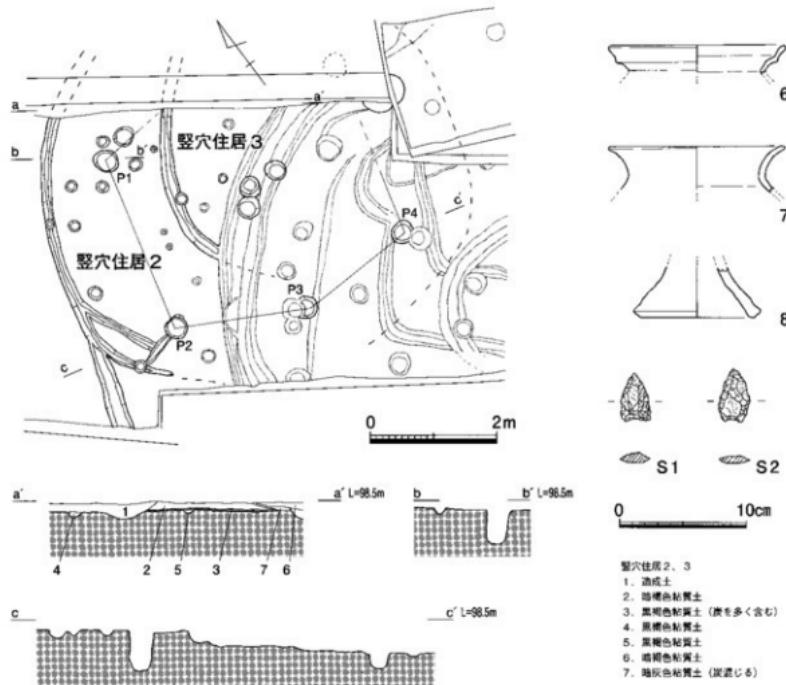


第5図 竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

1～5、鉄器M1のほか石器剥片などがある。1は壺、2は甕、3・4は高杯、5は器台と思われる。M1は不明であるが、鉄斧の可能性が考えられる。これらのことから、遺構の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

### 竪穴住居2（第6図）

調査区中央で検出した竪穴住居跡である。内側に住居3が存在し、東半は住居4と切り合っている。周壁溝が2条確認され、最低1回の建て替えが考えられる。周壁溝の形状から平面形態は円形と考えられ、直径8mの規模に復元できる。後世の削平を受けて残りが悪く、床面までは5cmと非常に浅い。主柱穴は外側の周壁溝に沿って2基が認められ、さらに竪穴住居4の底面においても、これに対応する2本が確認できることから、本来6本柱構造と考えられる。中央穴は確認されなかった。埋土は黒褐色粘質土が堆積し、床面には炭を多く含む層で覆われていた。他の住居との切り合い関係は、土層観察から後述の住居3を切り、住居4に切られていると考えられる。遺物は、埋土中より弥生土器6～8や石器が出土している。6・7は甕である。8は高杯の脚部と考えられる。石器では石鏡S1・S2の他、サヌカイト剥片が12点ほど出土している。大きさは1～3cm、厚さ5mm程度の薄いものが多い。この他、1～3cm大の焼土塊が多数出土しているのが特徴的である。これらのことか



第6図 竪穴住居2～3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

ら、遺構の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

#### 竪穴住居3（第6図）

調査区中央で検出した竪穴住居跡である。竪穴住居2を掘り下げた段階で検出され、住居2の内側の位置に弧状に延びる周壁溝の一部を確認した。主柱穴は住居3に伴うものか定かではないが、竪穴住居4の西端で3基が確認された。埋土は黒褐色粘質土層である。切り合い関係は、住居2に切られている。本住居に伴う明確な出土遺物はなかった。他の遺構との関係や土色から、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

#### 竪穴住居4（第7～9図）

調査区東端で検出した大型の竪穴住居である。表土直下で検出された。中央部分を貫通する範囲のみの調査のため、東西規模は確定できたが、南北両側は調査区外に統く。北側の一部は確認調査時のT2において柱穴、溝が確認されている。西端は竪穴住居2、3と切り合い関係にある。平面形態は円形を呈すると考えられ、東西幅は最大で直径10mを測る。深さは最大40cmを測る。全体を10cmほど掘り下げた段階で、西壁壇においては周壁溝が確認されたため、最低1回の建て替えが認められる。壁際から30cm内側でもう1段下がりが認められたが、明確な周壁溝は検出されなかった。東壁側にはやや広くて浅い周壁溝が確認され、2条が重複していると考えられる。主柱穴は内外2重になっており、内側が4本で構成され、壁側には現状で6本、本来9本柱で構成されていると推定される。柱穴は直径30～40cm、深さ20～30cmとしっかりしたものである。中央穴は不整円形で直径110cm、深さ40cmを測り、二段に掘られている。穴の周辺は被熱した焼土が堆積していた。中央穴を開こうように幅10～20cm×高さ5cm程度の土手が検出され、直径は25mを測る。また中央穴の南側に接して炭が充填された長さ2m×幅80cmの長方形の浅い土壙が併設されている。炭層は5cmと浅い。また中央穴から南東へ向けて溝が2条切り合うように重複して存在し、屋外へ延びる溝と見られる。この溝と中央穴との取り付き部分には溝が埋まつた後に比熱を受け、焼土が堆積している。中央穴と東側周壁溝との間の床面には逆くの字に屈曲する幅広の溝が確認された。西側には対応する溝はないが、平面くの字状になった3cmほどの段差がある。この溝の他、中央穴へ向かって3条の小溝が取り付いている。その他、西側の周壁溝の外側に、小ピットが添うように並ぶ。住居埋土は概ね下層が黒褐色粘質土層、上層が暗褐色粘質土層である。埋土中から比較的多くの土器が出土しており、特に中央穴及び土手付近の床面から比較的まとまって出土している。

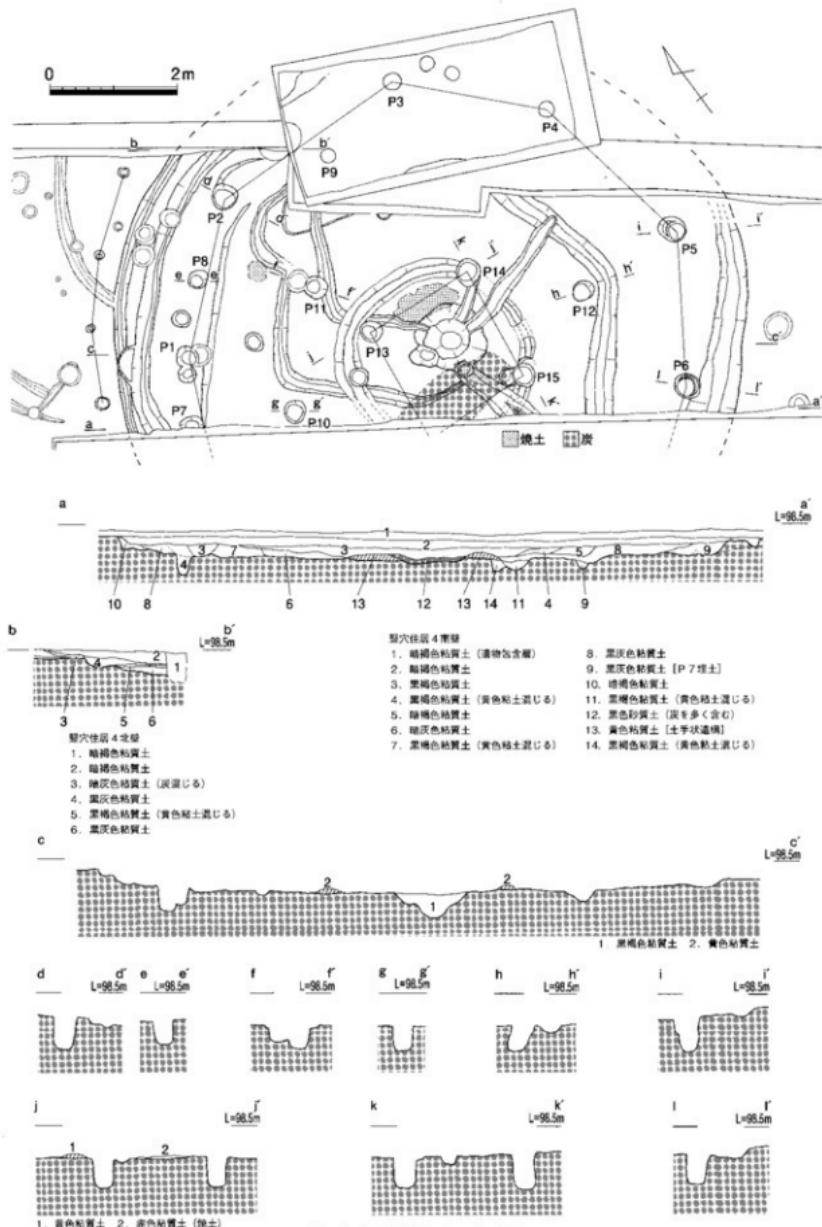
出土した遺物に弥生土器9～48がある。破片が多く復元できるものは少なかった。9～15は壺である。16～26は甕で、口縁形態はナデにより2重口縁になるものが多く、部体は左下がりから横方向のタタキ目が目立つ。27～33は鉢である。このうち29は明褐色を呈し、県南部からの搬入品の可



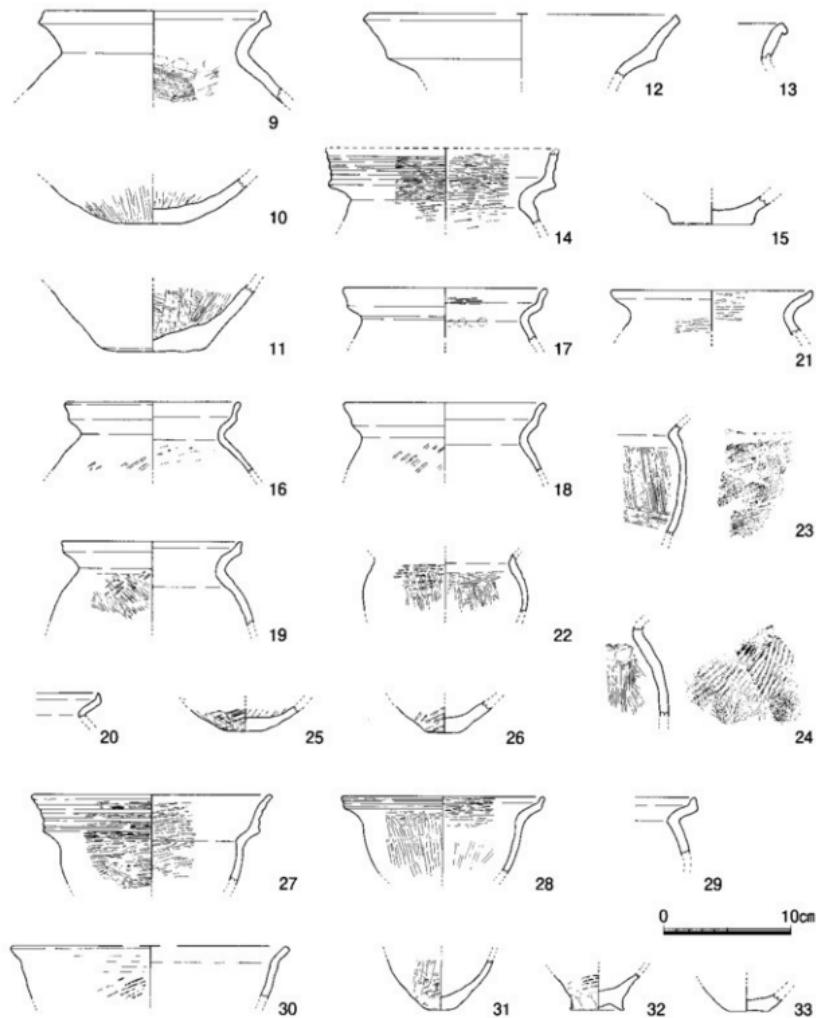
竪穴住居2出土 サヌカイト剥片



竪穴住居2出土 燃土塊

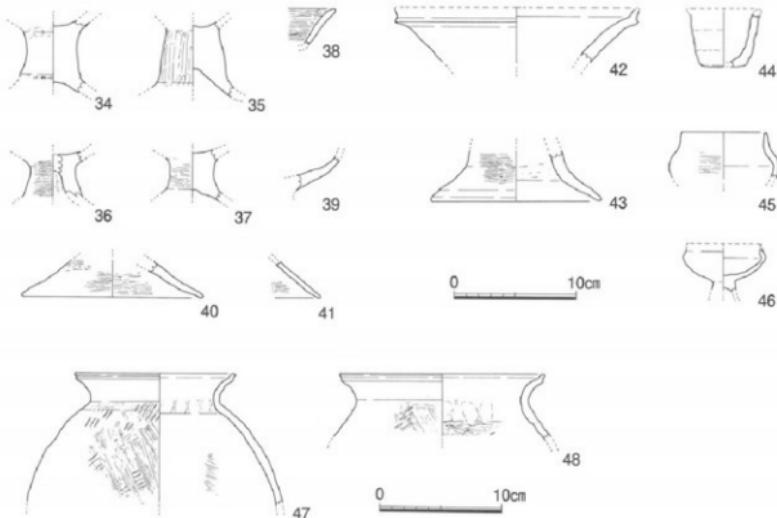


第7図 深穴住居4 (1/80)

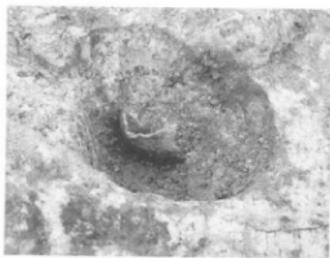


第8図 積穴住居4出土遺物①

能性がある。34~41は高杯で、短脚のものが多い。42~43は器台と考えられる。44~46は小型製品である。この他、P14から47、P3から48が出土している。47・48はくの字口縁の甕で端部をつまみ出す特徴を持つ。これらの土器以外に、3~5cm程度の土製塊が2点発見されている。これらの出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期末~古墳時代初頭と考えられる。



第9図 積穴住居4出土遺物②



豊穴住居4P14 土器(47)出土状況



豊穴住居4出土 焼土塊

## 2. 中世の遺構・遺物

### 柱穴列1（第4図）

調査区東端で掘立柱建物の一部と見られる柱穴を2基検出した。柱穴の規模はいずれも直径30cm、深さ30cmを測る。柱穴の埋土は基本的に褐色砂質土である。柱穴からの出土遺物として、勝間田焼小片が出土していることから、概ね12世紀～13世紀と考えられる。

### 第3節 まとめ

#### 1. 遺跡の広がりについて

遺跡周辺の地形は、標高250mの間山から南に派生した尾根群が平野に突き出すように延び、その尾根の裾、西南方向に張り出すなだらかな台地状地形が広がる。尾根は標高120m前後、遺跡の立地する台地は99m、平野では96m前後を測る。土居遺跡はこの台地に沿うように広がっていると思われる。東側の尾根を背にし、北側には埋め立てされた吉政池があつて谷地形で下がる。西へは徐々に地形が下がっていき、過去の試掘成果から西100mの水田までは同様の安定した地山が続く。南150mの位置は平成19年度試掘調査で中世を中心とした土壙・溝が確認され、弥生時代の包含層は失われていた。南200mの位置には、県教育委員会の発掘調査区があり、古墳時代の住居跡や中世の集落が確認されている。弥生時代後期末の遺物は少量出土しているのみで遺構は確認されていないが、中世期の削平が何え、集落が存在した可能性が高い。このことから集落城は東西200m×南北300m程度に広がると考えられる。このような立地にあって、今回の調査区は台地でも一番高い場所にあたり、弥生時代後期末～古墳時代初頭の短期間に密集するように住居跡が確認されていることなどから、今回の調査区周辺が集落内において中心となる場所であった可能性が高い。

#### 2. 大型竪穴住居について

今回、台地の頂上にあたる場所において弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴住居が4基確認された。いずれも規模が大きい竪穴住居のみで構成され、住居1と住居2はそれぞれ直径7.5mと8mを測り、住居2の主柱穴は6本である。住居4は直径10mを測るかなり大型のもので、主柱穴は内側4基、外側9基で構成される。内部の施設も特徴的で、中央穴を囲む円形の土手の存在、中央穴に併設された小柱穴や炭が充填された長方形の土壙などがある。これはいわゆる「一〇土壙」と呼ばれているもので、弥生時代中期～古墳時代初頭の播磨地域で類例が多く、燃焼施設として細かな分類が行われている。<sup>(1)</sup> <sup>(2)</sup> <sup>(3)</sup> <sup>(4)</sup> 町内でも周辺の中小遺跡、官ノ上遺跡で確認されている他、県南部の百間川遺跡群などでも確認され、県内では弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期に比較的多く認められる。

大型の住居という点に関して、美作地区における弥生時代後期の10m以上の規模を持つ大型住居は中央穴の周囲に4本と周縁溝の周りに柱穴を配置したものが多く、特殊遺物が多いことや同時期の住居が複数みられることが指摘されている。<sup>(5)</sup> 土居遺跡の住居4についてみれば、柱配置や一〇土壙、ミニチュア土器や焼土塊の存在など美作の大型住居にみられる特徴を備えていると考えられる。また、竪穴住居の規模からC類：主柱穴8本以上、B類：6・7本、A類：それ以下の3つに分類され、多くの後期集落がC類の大型住居とB・A類の中型・小型住居数軒がまとまって住居群を構成するとの指摘もある。<sup>(6)</sup> 土居遺跡は住居4がC類、住居1・2はB類に当たはめることができる。住居4軒がほぼ同時期と考えられることから、住居1と住居2もしくは住居4が同時併存し、住居群を構成すると考えられる。土居遺跡の全容はわからないが、周辺に同時期の小～中型の住居が発見される可能性が高いと考えられる。これらのことから大型の住居4が規模の面や一〇土壙などの存在、出土遺物などから集落内において、集会施設や工房などの機能を持つ中心的施設であったと考えられる。また、重なって存在する中型の住居2においてもサヌカイト剥片や焼土塊などが出土していることから住居4

と同様の性格を持っていたと考えられる。大型堅穴住居は建て替えの際も場所をあまり変えず、同じ場所を選定することも中心的役割を持つ施設の特徴ではないかと考えられる。

### 3. 出出土器について

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器群が出土している。美作地域の弥生時代後期土器については、山陰や吉備、近畿北部や近畿地方などの様々な地域の要素が複雑に融合しており、津山中央部以西では山陰系、津山東部以東では近畿や近畿北部系の影響を受けた土器が多いとい<sup>(7)</sup>った地域差が認められている。中でも津山東部、勝央町や美作市の事例が特に少なかったが、最近になって宮ノ上遺跡や鎌倉山遺跡などで土器様相が少しずつ明らかくなっている。特に宮ノ上遺跡は<sup>(8)</sup>瀬川を挟んで南800mと近く、同時期の土器が多く出土している。今回出土した土居遺跡の土器群は<sup>(9)</sup>小片が多く、全形のわかる資料が少ないが、壺について見てみると口縁形態から大きく「く」の字口縁と有段口縁の二種類に分けられる。<sup>(10)</sup>くの字口縁では近畿地方の5様式系に見られる端部を単純に丸く收めるもの、近畿北部で見られる端部を強くナデて、1条の沈線を施したようになるものがある。有段口縁では、美作地域に特徴的な一度短く外反し、さらに短く立ち上がるものが目立つ。今回はいわゆる山陰系の口縁を持つものは確認されなかった。上記の壺の口縁形態は他地域の影響を示すかのように様々であるが、体部の成形には粗いタタキ目を施した後タタキを残すものや削毛で消すものが大半を占めており、製作には共通してタタキ技法を用いている。このことから土居遺跡の土器群は、津山東部以東の土器様相、つまり近畿や近畿北部の影響を受けた口縁やタタキ技法が多く見られる点で共通するものである。近隣の宮ノ上遺跡でも山陰系や吉備系の壺が存在する点が土居遺跡とは異なるが、基本的な土器様相は同じと考えられ、少なくとも勝央町南部一帯は同じ土器様相の見られる地域と考えられる。搬入品については、胎土分析等を行っていないものの、県南の土器の特徴を持ち、胎土が明褐色を呈する大型鉢片が認められる。乳白色のミニチュアの鉢や、近畿北部に多い受け部がハの字に開く器台などは搬入の可能性もあるが、大部分が在地の土器と考えられる。また、弥生時代末～古墳時代初頭に含まれる今回の土器群の詳細時期については、美作で用いる大田十二社遺跡の後期土器編年<sup>(11)</sup>に照らし合わせると、大田十二社4式に位置付けられる。4式は概ね近畿地方の庄内式期<sup>(12)</sup>に併行するが、時期幅があるため、さらに細分される可能性がある。今回の土器群は小片が多くまとまった資料でないことから、細かな時期比定が困難であるが、およそ庄内式併行でも前半期ではない<sup>(13)</sup>かと考えている。また県南部ではXa～b期に併行すると見られる。

### 4. 後期の集落について

土居遺跡のある岡・黒土地区は町内でも多くの遺跡が存在し、発掘調査などにより弥生時代の集落の様子が比較的明らかとなっている。間山の麓には比較的平坦な尾根が広がり、丘陵全域に中期後半～後期後半まで展開する小中遺跡が存在する。住居総数300軒以上が確認されていることから、瀬川下流域の拠点集落と考えられる。後期中頃には、直径12mの堅穴住居が存在するなど爆発的に集落が<sup>(14)</sup>発展するが、後期後半には集落が縮小し、小さな集落となっている。これに代わる後期後半の大きな集落は確認されていない。後期後半～末には間山山頂では田井ちご池遺跡が出現するが、検出された<sup>(15)</sup>5軒すべて焼失住居という点で一時的な集落と考えられる。後期末～古墳時代初頭に入ると今回の土居遺跡や宮ノ上遺跡があり、比較的大きな集落が展開する。宮ノ上遺跡は弥生時代中期後葉～古墳時<sup>(16)</sup>

代初頭に展開する集落であるが、特に後期末～古墳時代初頭には直径9mを超す住居3軒の他、一〇土壙を持つ住居など、時期的にも内容も今回の土居遺跡との関係が深い。その一方で宮ノ上遺跡には方形住居が多いことや、外来系土器が目立つこと、集落が継続的という点については集落間の差が認められる。地域の拠点であった小中遺跡は後期中頃に最盛期を迎えたが、一転して後期後半には解体へ向かう。その要因は社会背景の変化によるものか不明であるが、後期後半以降、周辺に集落が出現する状況を見れば、小中遺跡の衰退が関係していると考えられる。特に土居遺跡は位置的にも小中遺跡の集団が移り住んだ集落の可能性を考えられる。

## 註

- (1) 小柴治子「10（いちまる）型中央土壙の変遷」『統文化財学論集』文化財学論集刊行会 2003
- (2) 朝倉秀昭ほか『小中遺跡、白溢古墳群、小中古墳群、湯ヶ溢古墳』岡山県埋蔵文化財調査報告 117 岡山県教育委員会 1997
- (3) 榎田英樹ほか『国司尾遺跡、坂田遺跡、坂田墳墓群、宮ノ上遺跡、宮ノ上古墳群』岡山県埋蔵文化財調査報告 197 岡山県教育委員会 2006
- (4) 和田 剛「百間川遺跡群における弥生時代の堅穴住居について」「百間川兼基遺跡4 百間川沢田遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 208 2007
- (5) 氏平昭則「九番丁場遺跡2区で確認された大型住居（堅穴住居7）について」「立石遺跡 大開遺跡 六番丁場遺跡 九番丁場遺跡」岡山県埋蔵文化財調査報告 165 岡山県教育委員会 2002
- (6) 中山俊紀「沼遺跡と弥生集落」吉備考古ライブラリ11 吉備人出版○2005○○
- (7) 中山俊紀「津山の弥生土器4」「年報津山弥生の里」7号 津山弥生の里文化財センター
- (8) 前掲註 (3)
- (9) 松本和男「鎌倉山遺跡」『美作町史資料編1（考古・古代・中世）』美作市 2006
- (10) 榎田英樹「第6章まとめ」「国司尾遺跡、坂田遺跡、坂田墳墓群、宮ノ上遺跡、宮ノ上古墳群」岡山県埋蔵文化財調査報告 197 岡山県教育委員会 2006
- (11) 中山俊紀ほか「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財調査報告第10集 津山市教育委員会 1981
- (12) 匿 正雄「岡山県北部における庄内式併行期の土器様相」「花園大学考古学研究論叢」花園大学考古学研究室 2001
- (13) 高橋 謙「弥生時代終末期の土器編年」「岡山県立博物館研究報告」9 岡山県立博物館 1988
- (14) 前掲註 (2)
- (15) 光永真一「田井たれおず遺跡・出井ちご池遺跡・岡東高塚遺跡」岡山県埋蔵文化財調査報告 171 岡山県教育委員会 2003
- 物部茂樹「田井ちご池遺跡」岡山県埋蔵文化財調査報告 185 岡山県教育委員会 2004
- (16) 前掲註 (3)

---

# 写 真 図 版

---

図版  
1



調査区西半分  
(竪穴住居1・2)  
検出状況 (東から)



完掘状況 (西から)



竪穴住居1北半分  
(北から)



堅穴住居2・3床面検出状況  
(南から)



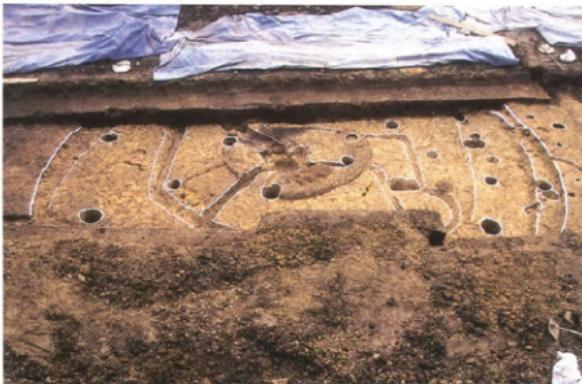
堅穴住居2・3完掘状況  
(北から)



堅穴住居4検出状況  
(東から)



完掘状況  
(東から)



竪穴住居4 完掘状況  
(北から)



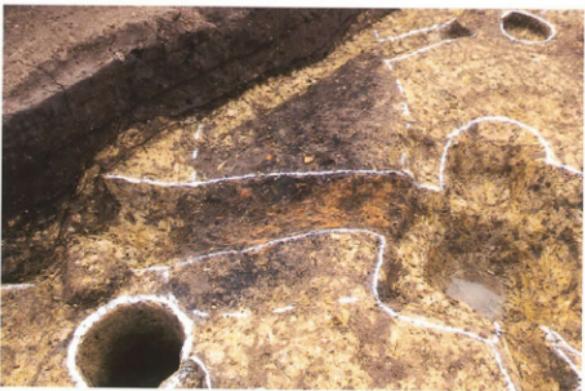
竪穴住居4 完掘状況  
(西から)



竪穴住居4中央穴堆積  
状況  
(南から)



竪穴住居4中央穴周辺  
(北から)



竪穴住居4長方形土壙  
(東から)



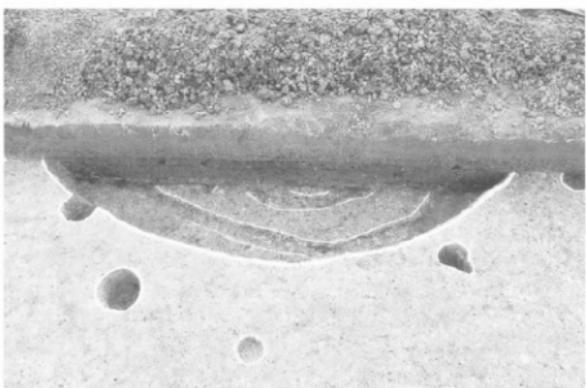
調査区遠景（北から）



完掘状況（西から）



完掘状況（東から）



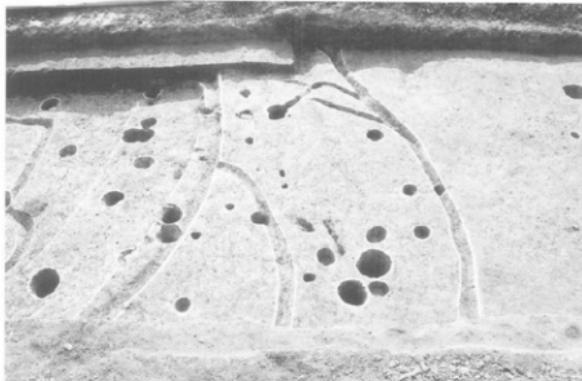
竪穴住居 1 北半分  
(北から)



試掘 T 1  
竪穴住居 1 南半分  
(北から)



竪穴住居 2 ~ 4  
(西から)



竪穴住居 2・3  
(北から)



竪穴住居 4 (西から)



竪穴住居 4 (東から)



試掘 T 2  
竪穴住居 4 北半分  
(東から)



竪穴住居 4 中央穴周辺  
(東から)



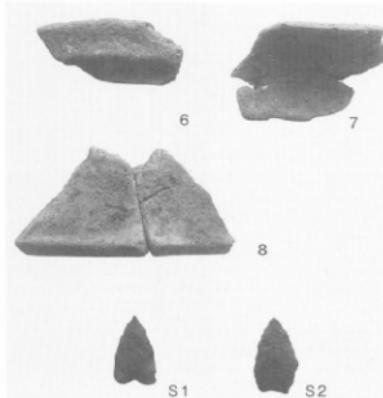
竪穴住居 4 南面堆積状況  
(北から)



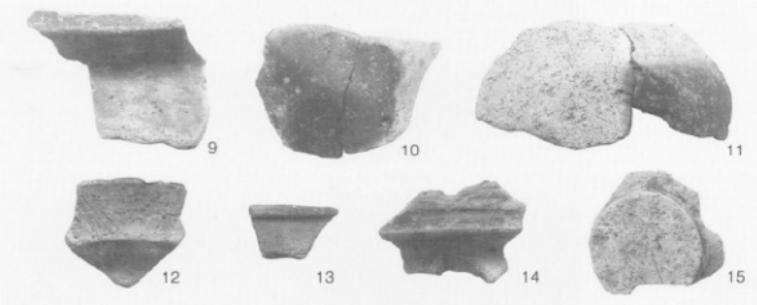
中世期の柱穴列 1  
(南から)



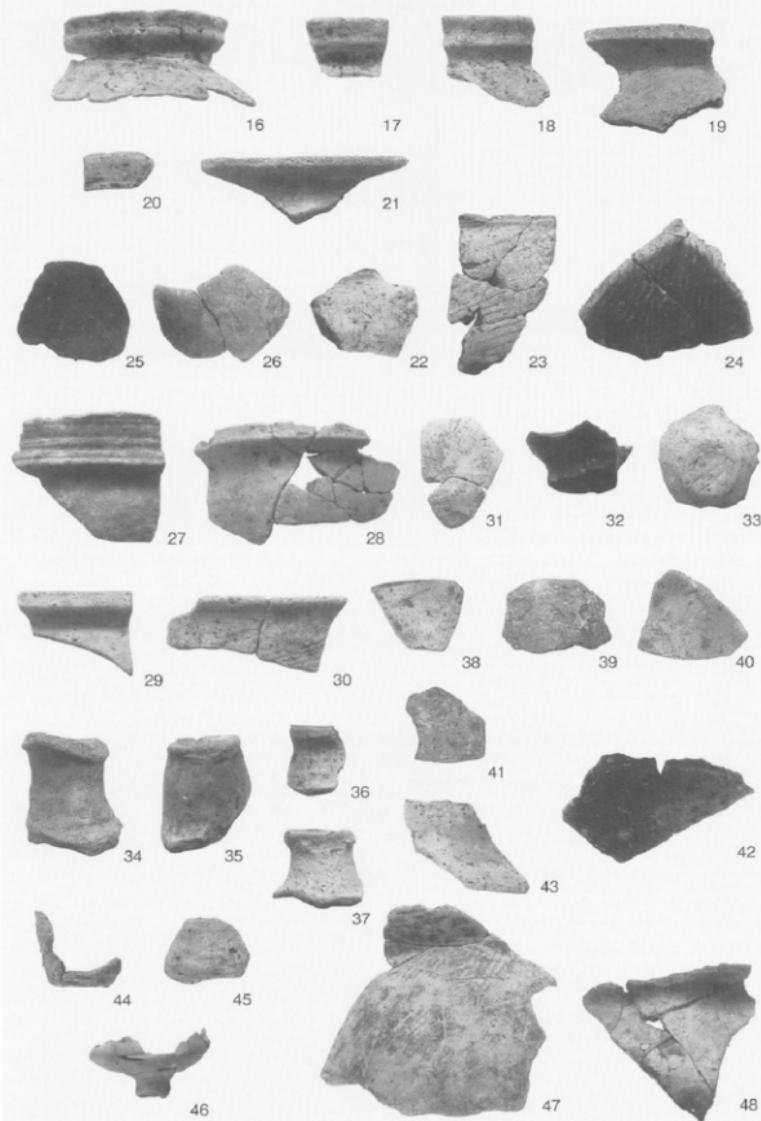
竪穴住居 1 出土遺物



竪穴住居 2 出土遺物



竪穴住居 4 出土遺物 1



竪穴住居4出土遺物2

# 報告書抄録

ふりがな	どいいせき						
書名	土居遺跡						
シリーズ名	勝央町文化財調査報告						
シリーズ番号	8						
編著者名	團 正 雄						
編集機関	勝央町教育委員会						
所在地	〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田200-1						
発行年月日	2009年3月29日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
							。
どいいせき 土居遺跡	岡山県勝田郡勝央町 黒土上	33622	35 01 39	134 08 00	2008.1.12~31	150	分譲住宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土居遺跡	集落跡	弥生時代後期末	竪穴住居跡 4軒 柱穴 20基	弥生土器、須恵器、勝間田焼、石器、剥片	1軒は直径10mの大型竪穴住居と判明。また周辺で石器製作を行っている。
		中世	柱穴 2基		

**印刷データ**

紙 質 表 紙=ハイマックインレーマットアート20kg

本 文=サテン金蔵110kg

写真団版=サテン金蔵110kg

文 字 モリサワ書体 MQ・明朝・正体

本文画面 Macintosh

写 真 カラー=4色分解

本文写真=カラースキャナー175線

写真団版=モノクロスキャナー175線

---

勝央町文化財調査報告 8

**土 居 遺 跡**

2009年3月29日発行

編集・発行 勝央町教育委員会  
〒709-4316 関山県勝田郡勝央町勝間田200-1  
TEL (0868-38-2580)

印 刷 株式会社廣陽本社  
〒708-0052 関山県津市田町22  
TEL (0868-22-7221)

---

